

当レポートでは2016年12月末時点で統合報告書を発行している334社のレポート内容を分析し、その動向を広く発信することを目的としている。第12回となる今回は、各社のマネジメントメッセージの状況について報告する。

統合報告書におけるマネジメントメッセージは重要な情報となっている。実際、発行企業334社全ての報告書でトップメッセージが確認できた。

国際統合報告フレームワークでは、ガバナンス責任者が報告書に対する責任を受け入れる表明を含めるとしている。CGコードにおいても、中期経営計画は株主に対するコミットメントの1つであるという認識で、取締役会が企業価値向上を促す立場としての責任が明確にされている。

報告書中の戦略等の大コンテンツにおいて、社長(CEO等の類似名称含む。以下同じ)のみがメッセージを発しているケースは上記334件中181件、戦略メッセージ等で社長以外のマネジメントメンバーが登場しているケースは153件であった。登場人物として最も多かったのが、CFO(財務部長等の類似名称含む)が80件、続いて会長が65件であった。その他、COOやCTO(最高技術責任者)が関与しているケースも各々10件強見られた。

メッセージの形式としては、「トピック説明」形式が267件、「Q&A・対談・インタビュー」形式が合計で67件であった(右表参照)。また、トップメッセージとは別に主に巻頭付近で「ご挨拶」のセクションを設けている会社も81社見られた。

そのトップによる「ご挨拶」も含めた上でのトップメッセージに割り当てている平均頁数は5.1頁、中央値も5頁であった。なお、最もパターンが多かったのが4頁(70社)であった(右グラフ参照)。旧来のアニュアルレポート等におけるトップメッセージでは、中期経営計画や当期の経営成績の振り返り等過去情報に重点が置かれている傾向があったが、統合報告書ではトップメッセージに代表される戦略コンテンツ

において、非財務情報を含む企業の目指す方向性と中長期の戦略や将来ビジョンといったコーポレートストーリーまで確認できるケースが多くなっている。それにより、ステークホルダーとの協働、株主との建設的な対話を図ることができる。

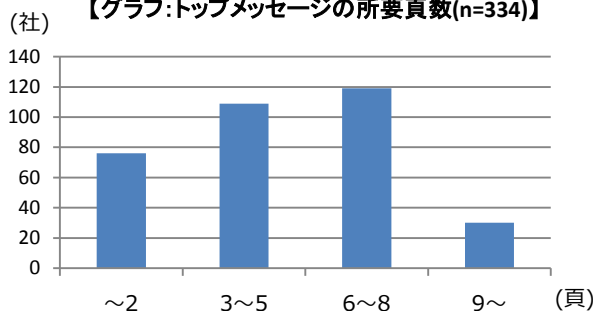
実際にトップメッセージで語られている内容は、中長期の課題から始まり、会社が属する産業の将来見通し、還元方針、リスクと機会、投資戦略など多岐に渡っていた。投資戦略や財務戦略は、トップに代わりCFOが発しているケースも多く、ガバナンスのセクションにおいては、会長のメッセージが掲載されているケースも多く見られた。

トップが成長ドライバーを述べ、課題と捉えている事とその対策等を真摯に述べていくことは、中長期の投資家獲得の最重要ファクターと考えられる。長期投資スタンスの投資家とのエンゲージメントを可能にしながら、その他のステークホルダーにも共鳴してもらうためには、マネジメントメッセージの更なる工夫・充実が期待される。

【表:トップメッセージの形式(n=334)】

トピック説明	267
Q&A	54
対談等	7
インタビュー	6

【グラフ:トップメッセージの所要頁数(n=334)】



(出所) 株式会社ディスクロージャー&IR総合研究所 ESG/統合報告研究室の調査による